
アンリ・プーライユとジョルジュ・ヴァロワ における『文学の新時代』（1930）を めぐる協同¹⁾

吉澤 英樹

要 約

1930年作家アンリ・プーライユは『文学の新時代』を発表し、フランス独自のプロレタリア文学運動を立ち上げる。それは前年に誕生したポピュリズム文学や次第に文学場において幅を利かせるようになるソビエト経由のプロレタリア文学とも違った立場であり、それゆえに30年代の文学場において次第に孤立していくようになる。このような立場はどこからやってきてその内実はどのようなものなのか。本稿では出版元のヴァロワ社を経営し、自身が思想家でもあったジョルジュ・ヴァロワとの関係に着目し、20世紀初頭のヴァロワがその一員であった社会芸術グループの運動の系譜にプーライユが自身のプロレタリア文学運動を位置付ける経緯を分析する。そこからプーライユの文学観の内実とフランス・プロレタリア文学運動がたどる運命の端緒を捉えることを目的とする。

はじめに

1920年代初頭アンリ・プーライユ（1896–1980）は、批評家フレデリック・ルフェーヴルの手ほどきでグラッセ社のプレス担当の職を得る²⁾。その後、

1) 本稿は令和5年度科研費助成事業「フランス第三共和政期の非党派・非宗教的プロレタリア文学にみる共同体の想像圏」（基盤研究（C）研究課題番号19K00485）の研究成果発表の一環として執筆された。

2) Thierry Maricourt, *Henry Poulaille*, Manya, 1992, p. 67.

処女作『彼らは四人だった』(1925)を筆頭に復員後の世界を自伝的に描き出した小説『平和の創出』(1926)、子供向けの『昔むかし……』(1928)などの文学作品を刊行する一方、さまざまなメディアに数多くの記事を寄稿するなど積極的に文学場へ参入していく。そして1930年に入ると『文学の新時代』、続いて翌31年には雑誌『新時代』と、コミンテルンとは協同しないかたちでフランスにおける独自のプロレタリア文学運動を立ち上げ、その中心を担う役割を引き受ける。しかし、ジャン＝ミシェル・ペルーが指摘するようにプーライユが積極的に文学場と関わりを持つようになる1920年代後半においてプロレタリアという概念は十分に明確化されたものではなく、その意味においてこの作家の思想圏においてそれほど重要な位置を占める概念ではなかったとも言える³⁾。さらにプーライユは、フランス共産党の機関誌である『ユマニテ』の文芸欄の主幹を勤めていたマルセル・マルティネと親交を結ぶ一方で、1928年に創刊されたアンリ・バルビュスの『モンド』紙の主要な寄稿者の一人として、左派系の文学運動の枠内で活動をおこなっている作家としての側面が強い。また1929年にはアンドレ・テリーヴとレオン・ルモニエが率いるポピュリズム文学運動が生まれ、プーライユ自身が第一回ポピュリズム文学賞の候補として選ばれ、それを辞退すると『新時代』の寄稿者としてプーライユの運動の担い手の一人であった『北ホテル』(1929)

3) Jean-Michel Péru, « Position littéraire et prise de position politique, le Groupe des écrivains prolétarien », *Itinéraire*, n° 12, 1994, p. 30. ペルーは労働総同盟 (CGT) の機関誌である『人民』誌に大量に寄稿されたプーライユの記事をスクリーニングして20年代後半の彼のプロレタリア観を結論づけている。また論者も20年代後半のプーライユの小説における「プロレタリア」概念の揺れについて論じている(『民衆・群衆・プロレタリアー文化的オルタナティブとしての1930年代フランス・ポピュリズム文学の構想』『アカデミア文学・語学編』108号, 2020年, 151-152頁)。ただし、ジャン＝ピエール・ベルナルが1928年におこなわれた『モンド』紙のアンケートに言及しながら指摘しているように、当時ソビエト経由のプロレタリア文学が流行し始め、プーライユ自身も来るべきプロレタリア文学に可能性を見ていることは事実である(J・P・ベルナル『フランス共産党と作家・知識人—1920年～30年代の政治と文学』杉村昌昭訳, 柘植書房, 1979年, 47頁)。

で知られるウジューヌ・ダビが代わりに同賞を受賞するなど、すでにブーライユに近い文学観を持つ文学運動が先行して存在していた。このような文脈から考えると、なぜブーライユが1930年に『文学の新時代』を刊行しプロレタリア文学運動を立ち上げ、その中心人物となることを引き受けたのだろうかという疑問が残る。確かにポピュリズムはブルジョワ階級によって先導された文学運動であり、ブーライユがテリーヴらの運動に参加しなかったことにそれほど違和感はない⁴⁾。しかし、その後独自のフランス・プロレタリア文学運動を引き受けることによって、コミンテルン系のプロレタリア文学者からはファシストに対する距離の取り方を批判され⁵⁾、35年の国際作家会議においては発言を拒否され会場から追放される⁶⁾、といったその後ブーライユが巻き込まれることになる困難を思えば、コミンテルンの立場と一定の距離を保ちながら30年代の文学場において左派系作家の中心人物の一人として大きな発言権を持ち、ブーライユとかなり近い立場にあったバルビュスが形成する場の中で引き続き活動を続けていればよかったのではないか。なぜブーライユは立ち上がったのか、そして苦難の道を歩まなければならなかったのか。本稿では30年のブーライユの「決心」の背景を、著書『文学の新時代』（1930）雑誌『新時代』を刊行した版元であるヴァロワ社を運営していたジョルジュ・ヴァロワとの関係から考察したい。

ジョルジュ・ヴァロワと『新時代』

ジョルジュ・ヴァロワことアルフレッド＝ジョルジュ・グレサンは、ブーライユより二十歳近く年長で1878年にパリ南郊モンルーージュで精肉店を営

4) このことに関して、ブーライユ自身が1930年7月に刊行された『文学の新時代』においてポピュリズムと自身の文学観の間の類似点と相違点を明確化している。

5) J・P・ベルナル、前掲書、38-39頁。

6) 『文化の擁護—1935年パリ国際作家大会』相磯佳正、高橋治男他編訳、「編訳者あとがき」、法政大学出版局、697頁。

む家に生まれた⁷⁾。フランス初のファシズム運動を立ち上げたこと、そして目まぐるしい思想遍歴の涯に1945年にドイツのベルゲン＝ベルセン強制収容所でその一生を終えたことなどによって、ヴァロワの名は歴史に刻まれている。1906年からシャルル・モーラスの王党派政治組織であるアクション・フランセーズに加入し、1911年には原ファシズム的運動体セルクル・プルドンでの活動を通してジョルジュ・ソレルらと親交を結び、第一次世界大戦後は1925年に香水王のフランソワ・コティの資金援助のもと、フランスで初めてのファシズム運動であるフェソー (faisceau) を立ち上げその代表に収まる。しかし、この運動は長続きせず、支援者を引き連れて1928年6月にサンディカリズムに基づく運動体である「組合共和国」(La République syndicale) を立ち上げる。この時期に、ヴァロワは、1912年に自ら創立した出版社であるヌーヴェル・リブレリー・ナショナル社を発展解消させるかたちでヴァロワ社を立ち上げ、「青い手帖」という叢書において32ページ余りのコンパクトな体裁で毎週著者を変えた新機軸の出版物を半ばこの運動体の機関誌として定期刊行し始める。刊行物は政治思想的な著作が中心となるが、著者はヴァロワ自身をはじめシャルル＝アルベールその他、ベルトラン・ジュヴネル、マンデス・フランスなど急進党周辺の著者までサンディカリズム関係にとどまらない人物が名を連ねている。

このような時期にプーライユはヴァロワと知り合い、1930年に発表される大著『文学の新時代』の執筆へと向かっていくのである。直接のきっかけは1929年12月30日にヴァロワからプーライユに送られた書簡である⁸⁾。同

7) 本稿においてヴァロワのバイオグラフィーについては、この人物の1920年代末までに思想遍歴を紹介したイヴ・ギュシェの研究とパリ政治学院のアーカイヴに収蔵された Fonds Georges Valois の目録並びに同館収蔵資料を主に参照している。Yves Guchet, *Georges Valois-L'Action française-Le faisceau- La République syndicale*, Érasme, 1990; Odile Gaultier-Voituriez et Caroline de Laleu, *Inventaire: Archive Georges Valois*, Fondation nationale des Science Politiques Service des archives d'histoire contemporaine, 1992.

8) Lettre de Georges Valois à Henry Poulaille (30 décembre 1929). 本稿で言及及び引用するヴァロワとプーライユの間で交わされた書簡はすべてパリ郊外のカシャン市に設置さ

アンリ・プーライユとジョルジュ・ヴァロワにおける『文学の新時代』（1930）をめぐる協同

年12月28日に刊行された『モンド』紙82号に掲載されたシャルル＝ルイ・フィリップについてプーライユが書いた記事を読み感銘を受けたヴァロワから、日をあけずしてプーライユに送られたものである。ヴァロワはその内容に賛辞を送り、「青い手帖」叢書から刊行するために手短にフランスのプロレタリア文学を概観する報告を依頼している。この依頼を受けプーライユは『モンド』紙の記事を発展させるかたちで『シャルル＝ルイ・フィリップーポピュリズムとプロレタリア文学』を執筆し、1930年3月30日に同叢書から刊行する。この作品の執筆料の受領を確認する同年4月15日付のヴァロワからプーライユに宛てた書簡において、この内容をさらに発展させ200～220ページほどの書籍として刊行するための打ち合わせをすることを提案している⁹⁾。そしてこの作品は「わたしたちの文学系の仕事の端緒となるだろう（une sorte d'ouverture à nos travaux littéraires）」としている。この試みは当初の予定からさらに450ページ近くまで分量を増やし、『文学の新時代』として同年7月中旬に刊行される。また、プーライユはこの本の刊行と同時並行で自身が主幹としてヴァロワ社から『新時代』という名称でプロレタリア文学を主題に据えた文芸誌を9月から創刊する準備を進めていることが、ヴァロワ宛の8月7日の手紙への返答として書かれたプーライユ宛8月14日付の書簡の中に見られる予算を含めた打ち合わせに関するやりとりから確認できる¹⁰⁾。実際、この雑誌が刊行されるのは翌1931年の1月からとなるが、並行してヴァロワ社のプロレタリア文学系の出版物を刊行する叢書にも「新時代」の名が冠せられ、プーライユ自身の『日々の糧』（1931）やエミール・

れたプロレタリア文学資料館（プーライユ・アーカイヴ）に収蔵されたオリジナル資料の複写を参照した。資料の閲覧の許可並びに協力してくれた同館の管理人である文芸批評家・編集者のジャン＝ポール・モレル氏にはこの場を借りて感謝を申し上げたい。またモレル氏との仲介の労を執っていただいた中央大学名誉教授高橋治男先生にも併せて感謝の意を述べておきたい。

9) Lettre de Georges Valois à Henry Poulaille (15 avril 1930).

10) Lettre de Georges Valois à Henry Poulaille (14 août 1930).

ギョーマンの『吹きさらしの耕地にて』（1931）、トリスタン・レミ『元樽職人』（1932）など、雑誌に連動するかたちで続々と作品が刊行されていく。

一方で『文学の新時代』の着想には書簡に現れないヴァロワ側の文脈がある。1929年の1月にヴァロワは、「サンディカリストの書庫」叢書から『人類の新時代』（*Nouvel âge de l'humanité*）を刊行する。つまり、「新時代」という言葉はプーライユとの出会いに先行してヴァロワによって既に使用されているのである。また上述した雑誌『新時代』誌は1931年の1号から12号まではプーライユが編集長として自らの文学運動を推進する中心的な場として使用していたものだが、翌年彼はこの編集から手をひき、『プロレタリアート』誌へとその活動の場を移していく。一方その後ヴァロワはしばしのインタビューを置いて、自身が代表となってこの雑誌を引き継ぎ、当時進めていた「新時代運動」の機関誌として存続させていくことになる。そのことを考えると、「新時代」という呼称はプーライユではなくヴァロワが編み出した用語に由来しているものであり、プーライユはヴァロワの思想に次世代に属する自らの文学観をすり合わせるかたちでプロレタリア文学運動を組織していこうとしたことが窺われる。またプーライユが離れた後の1934年に至っても『新時代』誌には、プーライユの『文学の新時代』の広告が残り続けるのであり、ヴァロワにとってはこのプーライユとの共同作業は重要なものであり続けたことを示している。それゆえ、次節ではヴァロワにおける『新時代』の意味するところを確認した上で、ヴァロワとプーライユの文学領野での協同がどのような地点で成立したものであったのかを明らかにしていきたい。

『人類の新時代』（1929）における「新時代」の定義

1929年1月に刊行されたジョルジュ・ヴァロワの『人類の新時代』は「告知」と「あとがき」に挟まれた七章構成で、軍事国家から技術国家への移行

アンリ・ブーライユとジョルジュ・ヴァロワにおける『文学の新時代』（1930）をめぐる協同

をフェソー後のヴァロワの運動体である組合共和国が進むべき方向のマニフェストとして掲げる議論が展開される。

この「転向」の大きな原因として主張されるのが、ヴァロワにおける現代社会の時代区分の変更である。世紀をまたがるかたちで活動していたそれまでのヴァロワにとって、十九世紀の後に到来する二十世紀こそが現代を示す時代区分であった。フェソーを準備していた1924年に書かれた作品のタイトルが『世紀を越えて』（*D'un siècle à l'autre*）であり、彼のファシズム運動体の機関誌が『新世紀』（*Le Nouveau siècle*）であったことがその事実をよく示しているだろう。さて、『人類の新時代』の第一章ではこの時代区分の変更とその定義が語られているのを読者は目にすることができる。

一つの新しい時代 (*nouvel âge*)。それは世紀 (*siècle*) でも時期 (*ère*) でもない。しかし、精神がそれに見合った法則、秩序、規律を見出さなければ、その時代は中絶してしまうかもしれない。人類がより高次の形態に向かって着実に前進しているのは事実であるとしても、その運命は前進と後退の繰り返しであり、時には大仕事に失敗し、一世紀または数百年、あるいは千年単位で以前の状態に逆戻りすることもあるからである。人類はまた、ある世紀、ある年代 (*époque*)、ある時代 (*âge*) から別の時代へと移行するための適切な運動を見つけることができないために、ある年代の入り口、ある時代の始まりにおいて、失速したり、痙攣に陥ったり、自らを引き裂いたりすることもある¹¹⁾。

いくつかの時間的枠組みを示す用語と比較しながらヴァロワが明確化しようとする「時代」(*âge*) は、自動的にやってくる世紀 (*siècle*) や、持続を前提としない限定された時期 (*ère*) とは異なるものである。過去と断絶し、それを乗り越えてこれから長期間続いていく時間的展望を「新しい時代」(*nouvel âge*) として見ていることがわかる。またその「時代」という枠組みは人類の努力によってしか手に入れることのできない脆いものだという。

11) Georges Valois, *Un nouvel âge de l'humanité*, coll. « Bibliothèque syndicaliste », Librairie Valois, 1929, p. 15.

ここで問題となるのが、新たに設定されたこの時間的枠組みの分節点である。フェソー期のヴァロワにとっての現代への分節点は十九世紀から二十世紀という時間区分において思考されていた。しかしながら、この「時代」(âge)という用語を導入することによって、ヴァロワにおいてその分節点はドイツが第一次世界大戦でフランスに向けて進軍を始める1914年8月2日にずらされるのである。

1914年8月2日以来、全人類は底なしの混乱期に入り、ある者には大きな苦悩を、ある者には途方もない希望を抱かせている。大衆は確信も持たないまま、希望から苦悩へ、苦悩から希望へと行き来し、崇高なものから低俗なものへ、低俗なものから崇高なものへと揺れ動き、時には不可解な興奮に陥ったり、欺瞞的な安息に身を委ねたりしている¹²⁾。

この配置換えは一見、終末論的な想像圏の源泉を世紀末から世界大戦の厄災に移行させることによって時代に合わせて議論を更新しただけに見えないこともない。しかしながら、ヴァロワはその後すぐに20年代末の時点から振り返るかたちで、大衆を惑わす大戦がもたらした「希望」と「苦悩」の言説の正体を明確化している。つまり、「希望」は大戦中にロシア革命を経験したコミュニストたちが唱える資本家の支配の崩壊とプロレタリアートの到来であり、「苦悩」は、野蛮が世界を覆うことによって、文明の終焉、家族や祖国、秩序や私有財産といったものが微塵にされることを憂うアクション・フランセーズに代表される保守派に由来するものと見立てている¹³⁾。後者はヴァロワ自身の古巣でもあるのだが、1925年からのフェソー運動を推し進める過程で敵対関係となっていた。このような戦争が生み出す「カオス」を解決するのが、科学やテクノロジーに依拠するサンディカリスト的共和国の樹立であるのだが、その政治プログラムの内実を分析することは本稿が目的とするところではない。むしろ重要なことは、ヴァロワが「新時代」という

12) *Ibid.*, p. 13.

13) *Ibid.*, p. 14.

アンリ・プーライユとジョルジュ・ヴァロワにおける『文学の新時代』（1930）をめぐる協同

ものを大戦によってもたらされたカオスを解消するためのプログラムの実現への努力を通して初めて到来しうるものと考え、そのためのプログラムとして反動的な保守主義だけでなく Kommunismus をも否定していることである。1929 年末にヴァロワがプーライユに「新時代」のプロレタリア文学の実現について協力を依頼し、プーライユがそれを受諾した時点で、当時コミュニストであったバルビュスや後にコミンテルン系の革命作家芸術家協会（AEAR）の目指す道とは別のところに自身の立場を置くことを余儀なくされてしまっているのである。

リュシアン・ジャンの再評価と「社会芸術」運動の継承

ヴァロワは「新時代」という時間枠を持ち出すことによって、その担い手としてプーライユを選び出し、自身の政治プログラム実現へ向けた試みの傍らで、「新時代」のプロレタリア文学の概観並びにその歴史を提出する試みを依頼したわけである。結果的には『文学の新時代』を発表し、フランス独自のプロレタリア文学運動を率いていくのはプーライユであるのだが、この試みの発端においてヴァロワの意図がどのようなものであり、それがプーライユの試みをどのように誘導したのかこの節では確認したい。そのために少し長くなるが、前述したヴァロワからプーライユへ最初に送付された書簡の全文を引用する。

パリ 1929 年 12 月 30 日

親愛なる同業者仲間よ、

『モンド』紙に掲載されたシャルル＝ルイ・フィリップに関する熱のこもったあなたの記事を私はちょうど読み終えたところです。私はあなたと意見をまったく同じくするものだとどうしてもお伝えしたいのです。私がシャルル＝ルイ・フィリップの最初の友人の一人であり、30 年前にシャルル＝ルイ・フィリップやリュシアン・ジャンと共に私がプロレタリア作家の最初のグループを

結成したことをご存知ならば（ご存知なければ、私はそのようにお知らせします）、私のあなたへのこの同意は驚くに値しないものでしょう。

あなたが出した結論もまさに私の結論と寸分違いません。シャルル＝ルイ・フィリップとリュシアン・ジャンが世を去り、他の何人かの仲間たちも散り散りになってしまったことによって中断された仕事を再開しなければならないと、私は多くの仲間たちと一年以上話し合ってきました。新しいプロレタリア文学を再構築する時がまさに到来したのです。あなたとこのことについて話し合うことができれば非常に嬉しく思います。なぜならば、あなたがまさにそう感じていることが私にはわかるからです。すぐにまず手始めに「青い手帖」叢書で出せるような内容の報告をおこない、その中で、シャルル＝ルイ・フィリップ、リュシアン・ジャン、エミール・ギョーマン、ペギーや、当時の批評誌（『社会芸術』誌、『ランクロ』誌）などでキャリアを開始した他の何人かの作家たちの仕事を概観することができるように思います。資料が不足しているのであれば、私たちの同僚や私が提供することができます。特にシャルル＝アルベールはこの文学的努力の当初からいた人物です。私は当時彼と共にいましたし、その後も会い続けています。

この手紙を受け取った次の朝にでも私に電話をしていただけませんか。この件について話すために予定を組みましょう。

私はこの問題の全体に関してまとまった計画を練り上げており、あなたと話し合うことができればそれほど嬉しいことはありません。私は一年前からこの計画を温めていて、だからこそシャルル＝ルイ・フィリップに関するあなたの記事を読んでとても嬉しくなったのです。

親愛なる同業者仲間よ、私の敬意をどうぞお受け取りください。

ジョルジュ・ヴァロワ¹⁴⁾

まずヴァロワは初めて声をかける二十歳近く年下のプーライユに向けて同業者仲間（confrère）と呼びかける。これはサンディカリスト的な呼称に止まらず二人の共通点を確認する意図が読み取れる¹⁵⁾。政治運動への取り組み方

14) Lettre de George Valois à Henry Poulaille (30 décembre 1929).

15) 後の書簡では、「友」(ami), 「同志」(camarade) という呼びかけの表記も使用されるようになる。

は異なるものの、職業人としては二人とも出版業界の人間であった。前述したようにプーライユはグラッセ社の広告担当で生活費を得ていたが、ヴァロワは1903年から現在は高等教育機関向け教科書の出版元として知られるアルマン＝コラン社で働き始めその後、自ら出版社経営に乗り出した人物である。ヴァロワからプーライユへの呼びかけが「同業者仲間」であることはこのことを念頭に置いているのだろう。二人とも出版業界を知悉しつつ、出版人でありながら著者となって自ら発言の場を求めた人物だった。事実、ヴァロワはそうのように自身と同じ立場にありながらも世代的にはずっと若いプーライユに自らの文学領野におけるプロジェクトの実現を託していることが続いていく文章の中で明かされている。つまりそこでおこなわれるのは、『モンド』紙のプーライユの記事に賛同しつつ、その記事の主題となった作家であるシャルル＝ルイ・フィリップを当時の文学場の中に文脈化し、その中にヴァロワ自身を定位することである。具体的には、シャルル＝ルイ・フィリップとリュシアン・ジャンの名前をあげ、さらにその二名のほかに、農民作家のエミール・ギョーマン、『半月手帖』で知られるシャルル・ペギーを加え、『ランクロ』誌と共に、そこに『社会芸術』誌とシャルル＝アルベールの名を結びつけている。ヴァロワが書簡で言及するこれらの固有名詞の配置は何を意味するのか、順を追って確認したい。

まずヴァロワにとって重要なのはフィリップと共に名前が二回繰り返されるリュシアン・ジャン（1870～1908）である。リュシアン・ディユドネという本名を持つこの作家は、フィリップとともにパリ市役所の職員であり、書簡に登場する『ランクロ』誌は彼ら二人が作品を寄稿した雑誌である¹⁶⁾。ヴァロワは手紙に書かれているように彼らの友人であり、1908年にリュシアン・ジャンが他界した後、「リュシアン・ジャン友の会」を結成する。そして翌年に同じく世を去ったシャルル＝ルイ・フィリップに代わって1910

16) ミシェル・ラゴン『フランス・プロレタリア文学史』高橋治男訳、水声社、256-258頁。

年に自ら序文を執筆し、ジャンの作品集『人々のなかで』を出版している。この作品集はアンドレ・ジッドやウジェーヌ・モンフォールといった初期の『新フランス評論』誌（NRF）の人脈の助力を得て出版されているものであるが¹⁷⁾、ヴァロワは『社会芸術』誌とシャルル＝アルベール（1869-1957）の名前を出すことによって、書かれうるべき「新時代のプロレタリア文学史」の系譜の方向性をプーライユに前もって喚起させているのである。

『社会芸術』誌は1891年に創刊された雑誌で、ルイズ・ミシェルやジャン・グラヴといったアナキストからロダンやピサロといった芸術家やレオン・クラデルといった作家たちの協同によって「芸術実践と社会運動を統合する」手段を模索するクラブを前身としている¹⁸⁾。リュシアン・ジャンも「社会芸術グループ」の集会に参加しており¹⁹⁾、またヴァロワ自身もグループに加わっていた²⁰⁾。グループはジャンが参加した全体討議などに加え、1896年には定期的に公開講演会を主催し、後日小冊子として出版した。そこではベルナール・ラザールの『作家と社会芸術』、フェルナン・ペルティエ『芸術と反乱』に続き、ヴァロワの書簡で言及されるシャルル＝アルベールの講演『芸術と社会』が公刊されている。そこでシャルル＝アルベールは、イギリスでアーツ・アンド・クラフツ運動を推進したウィリアム・モリスに言及しながら²¹⁾、カーペット、カーテン、テーブルといった日常の家具をつくる労働者である職人と芸術の架橋に社会運動と芸術実践が統合される地点を模索

17) 吉井亮「ジッドとリュシアン・ジャン」『Stella』15号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1996年7月、146-150頁。

18) Anne-Marie Bouchard, « L'infécondité vicieuse des artistes — l'art social dans les réseaux médiatiques anarchistes », in Neil McWilliam, Catherine Méneux et Jules Ramos (dir.), *L'Art social en France: de la Révolution à la Grande Guerre*, Presses universitaires de Rennes, 2014, p. 194.

19) ミシェル・ラゴン、前掲書、257頁。

20) Yves Guchet, *Georges Valois, op. cit.*, p. 24.

21) Charles-Albert, *L'art et la société: conférence faite le 27 juin 1896, Salle de l'espérance*, Bibliothèque de l'art social, 1896, pp. 25-32.

する議論を展開している。

つまりヴァロワからプーライユに宛てられたこの書簡は、まさに世紀をまたがり活動した「社会芸術グループ」の芸術観をこれから始まる1930年の文学場においてリバイバルし系譜化することをプーライユにそれとなく指示しているのである。さらにそこで目を引くのは運動の当事者であったヴァロワ自身やシャルル＝アルベールが資料を執筆のために直接提供するという提案までするという、プーライユにかける圧の強さである。引き合いに出されるシャルル＝アルベールは「社会芸術グループ」の重要メンバーであった一方で、フェソー解体後にヴァロワの「組合共和国」運動の協力者として前述したように「青い手帖」に文章を寄せている。このことはヴァロワが「社会芸術グループ」の試みと「新時代」のプロジェクトを架橋しようとしていたことの証左ともなる²²⁾。

このようなお膳立てのもとでプーライユの『新時代の文学』は執筆されて、依頼から六ヶ月後に大著として上梓されるわけであるが、果たしてプーライユはヴァロワの提案を受け入れているのだろうか。答えは著作を紐解けばすぐに読者に与えられる。書籍は二部で構成され、第一部は第二部で展開されるプロレタリア文学を理解するためのパースペクティヴとして「新時代の文学のための導入」と題され、1901年に刊行されたジョルジュ・ソレルの「芸術の社会的価値」への言及から始まり、前述したベルナール・ラザールの講演『作家と社会芸術』からの引用を交えて、この著作が世紀を跨ぐ「社会芸術グループ」の価値観を継承していることを明確に示している。続いてシャルル・ペギーについての分析の後、再びソレルについての考察が続き、そこではこの思想家に対するヴァロワの証言が引用のかたちで紹介されてい

22) 事実、プーライユの手による前述の1929年12月28日付の『モンド』紙の記事においては、シャルル＝ルイ・フィリップの著作がNRF出版局から再販されたという言及はある一方で、社会芸術グループへの言及は一切されていない。(Henry Poulaille, « Il y a vingt ans mourait un grand écrivain du peuple: Charles-Louis Philippe », *Monde*, deuxième année n° 82, 28 décembre 1929, p. 3.)

る²³⁾。第二部で「フランス・プロレタリア文学—その作品と人物」では、書簡に登場するシャルル＝ルイ・フィリップ、リュシアン・ジャン、エミール・ギョーマンといったヴァロワの世代の作家たちの紹介から始まり、次第にマルセル・マルティネ（1887-1944）、トリスタン・レミ（1897-1977）、ウジェーヌ・ダビ（1898-1936）といったプーライユの世代のプロレタリア作家の紹介へと接続されている。そこでもとりわけリュシアン・ジャンについてのセクションではジョルジュ・ヴァロワの『世紀を越えて』からの引用だけでなく、ヴァロワが所有するリュシアン・ジャンの未公刊の書簡を引用までして紹介をおこなっている²⁴⁾。まさにヴァロワの資料を使用しながらその指示に従い、その意に沿うような作品をプーライユは実現しているのである。

結びにかえて

ジョルジュ・ヴァロワはファシズム運動「フェソー」における挫折をへて、活動の方向を軌道修正し新しい運動体である「組合共和国」へ移行するために過去を総括しつつ刷新する必要に迫られていた。その時期のマニフェストというべき『人類の新時代』では、単なる転向ではなく未来へ自身を開いていくための配置換えであるという側面が強調される。本を開いてまず読者の目を引くのは本編が始まる前の扉の裏に書かれたヴァロワの作品リストである。通常であれば年代順に作品が並ぶだけであるが、リストの前にこの本と以前刊行された著作との関係についての説明が挿入されている。

本書は、著者の仕事を総説し、更新したものである。それ以前の著作は資料として参照されたい。というも、これらの著作は、『人類の新時代』で開示される教義体系の総体へと導く遠からずも近からずといった連続体を表しているものだからである。

23) Henry Poulaille, *Nouvel âge littéraire*, Librairie Valois, 1930, pp. 94-95.

24) *Ibid.*, pp. 141-152.

そのように述べつつ、ヴァロワは1928年までのすべての著作が1907年に立てた定式の上に成立する本として作品リストを並べている。続く「読者への告知」ではこれまでの著書や自身の思想遍歴を紹介しながら、この著作の中においても不変であるもの、また更新されたものについて屋上屋を架すようなかたちで語っている。ある種の連続性を残しつつ、根本的に刷新すること、それは相反した願いではあるが、先述したようにヴァロワはそれを「世紀」から「時代」への配置換えによって実現しようと試みる。ただし、「新しい時代」の起点は世紀末を越え新世紀の始まるベルエポック期ではなく第一次世界大戦だった。自身の世代の価値観を再構成しつつ、新しい時代に接続すること、それを評論によって思考することは可能であったかもしれない。しかし、それを可視化することは当時五十代になっていた戦前世代のヴァロワ自身や還暦に達するシャルル＝アルベールではもちろんできないことだった。「新時代」の担い手として、戦争のもたらしたカオスの中で青春時代を送った動員世代の当事者である若い世代のプーライユを介して実現したことはある種の必然だったかもしれない。結果、ヴァロワは他者の手を借りて自身の目的を果たしたと言えるだろう。事実、「新時代のプロレタリア文学」のマニフェストとして出来上がった『文学の新時代』の内容は、上述したようにヴァロワの意図をかなり反映したものになっている。これは前提として、両者の文学観が近かったからこそ成立した協同作業であると言えるだろう。しかしヴァロワから用語を借りながら「新時代」の自身の世代が更新しつつあるプロレタリア文学をヴァロワがその一員であった「社会芸術グループ」の系譜に接続させるというパースペクティヴは果たしてそれまでのプーライユの文学史観に沿うものであったのだろうか。上記のようなヴァロワの視点を補完するプーライユ側からのプロレタリア文学史観の形成については稿を改めて論じたい。